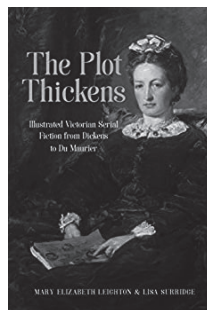


書 評

Mary Elizabeth Leighton & Lisa Surridge,
*The Plot Thickens: Illustrated Victorian Serial
 Fiction from Dickens to Du Maurier*
 (Athens: Ohio University Press, 2019)

橋野 朋子



本書は *The Broadview Anthology of Victorian Prose, 1832-1900* (2012) など、さまざまな著書や論文を共著で発表している Mary Elizabeth Leighton と Lisa Surridge が、ヴィクトリア朝の連載小説における「挿絵」の持つ「語り」の役割を事例研究的に考察したものである。本書の最大の魅力はその図版の多さにある。本書が扱う図版の数は実に 132 点に及ぶ。本書を手にとってまず目を引くのは、膝の上のやや大判の金褐色の冊子のようなものに手を添えて座る、ヴィクトリア朝的装いの婦人を描いた表紙カバーの肖像画である。本書はまずこの肖像画の説明から始まる。女性は画家ジョン・エヴァレット・ミレイの妻エフィーで、彼女が手にしているのは雑誌『コーンヒル・マガジン』である。本書の冒頭のページに示された『コーンヒル・マガジン』の表紙絵の図版と照らし合わせてみると、なるほど金褐色の色といい、はっきりではないがそこに描かれているデザインの輪郭といい、肖像画の女性が手にしている冊子が『コーンヒル・マガジン』であることが分かる。1860 年の創刊当初から『コーンヒル・マガジン』は、ミレイにとってイラストレーターとしての主要な活躍の舞台であった。

本書は『ロンドン塔』『デイヴィッド・コパフィールド』『虚栄の市』などの 1840 年代に分冊刊行された作品や、『コーンヒル・マガジン』『ワンス・ア・ウィーク』『グッド・ワーズ』『アーゴシー』などの 1860 年代のいわゆる ‘family magazine’ に連載された小説を、オリジナルの出版形態の「言葉」と「イラスト」の両方で読むケーススタディとなっており、著者 Mary Elizabeth Leighton と Lisa Surridge は、本書の目的を次のように述べる。

Our goal is to read Victorian illustrated serial novels in their original publication formats, asking how those forms imply specific reading practices and, in turn, demonstrating how our understanding of these texts shifts if we read them as their original Victorian readers did – in parts, over time, with illustrations constituting an integral part of the reading experience. (3)

本書は「序論」に続く各章が「自叙伝的小説」「歴史的小説」「写実小説」「センセーション小説」というジャンル別のケーススタディとなっているが、「序論」はむしろ本論でもあり、本書は「序論」単独の形でも十分有益な研究書となりうるものである。まずはその序論の内容に触れたいと思う。

序論においてはまず、ヴィクトリア朝における挿絵付き連載小説の隆盛の経緯が説明される。それによると、イラストが出版物に活用され始めたのは1830年代からで、1832年にイラスト入りの雑誌である『ベニー・マガジン』、1841年に『パンチ』、そして1842年に世界で最初の全面イラスト入りの週刊新聞である『イラストレイテド・ロンドン・ニュース』が創刊される。1830年代から1840年代にかけては、チャールズ・ディケンズの編集とジョージ・クルックシャンクのイラストによる『ベントレイズ・ミセラニー』(1837年創刊) や、『ロンドン・ジャーナル』(1845年創刊) などによって、イラストは定期刊行物における中心的な存在となり、19世紀半ばにおいては、雑誌や分冊刊行物の新刊号が店頭に並ぶ月末の‘magazine day’は当時の読者にとって一種の一大イベントであったという。1860年代になると、いわゆる‘family magazine’の台頭によって挿絵付き雑誌は全盛期を迎え、『コーンヒル・マガジン』(1860年創刊) はサッカレー、エリザベス・ギャスケル、アンソニー・トロロープ、ジョージ・エリオット、ウィルキー・コリンズなどの小説を、ミレイをはじめとする一流のイラストレーターによる挿絵付きで連載し、また、ディケンズ編集の『ハウスホルド・ワーズ』の出版から身を引いた出版社ブラッドベリー・アンド・エヴァンズがディケンズの雑誌の対抗馬として刊行に乗り出した『ワンス・ア・ウィーク』(1859年創刊) は、イラストレーターとしてミレイやジョージ・デュ・モー

リア、ウィリアム・スモールなどを採用した。

序章では続いて、各章での物語論的アプローチにおいて用いられる用語の解説が行われる。なかでも最も重要となる用語は‘prolepsis’ (先説法) と ‘analepsis’ (後説法) で、いわゆる「フラッシュフォワード」と「フラッシュバック」である。分冊刊行の冊子の表紙絵 (wrapper) はもちろんのこと、各章の始まりの飾り文字を兼ねたイラスト (chapter initial) や、毎号のオープニングページの見開きの口絵など、ヴィクトリア朝の挿絵付き連載小説は多くの場合、その印刷形態の観点から必然的に ‘prolepsis’ であった。例えば、ゆりかごから墓場までの人生の過程が描かれた『デイヴィッド・コパフィールド』の表紙絵や、ギロチンのイラストによってフランス革命のイメージだけでなく、処刑による結末をも示唆する『二都物語』の表紙絵など、各冊子を開く前に読者が目にする表紙絵は、読者に作品の内容を大まかな形で伝えるものとなっている。しかし、オープニングの挿絵は ‘prolepsis’ の役割を果たすと同時に、過去のナンバーの挿絵を見返すことによって ‘analepsis’ にもなりうるのであり、これらの挿絵は読者が作品を読み進めていくなかで、‘prolepsis’、‘analepsis’ 双方の役割を果たしていた。一方、印刷技術の向上に伴い、図版を活字の版に埋め込むことが可能になると、隣接する形で本文とイラストが同じ内容を描写する演出 ‘mimesis’ (模倣) が見られるようになったという。サッカレーは『虚栄の市』において、‘Miss Sharp put out her right fore-finger -’ という活字に続く形で、ベッキーがジョージ・オズボーンに向かって人差し指を突き付ける挿絵を配置したり、手をピアノの鍵盤に置いて振り向きざまのミス・シュヴァルツの挿絵を、活字の “‘Lor!’ cried Miss Swartz, spinning swiftly round on the music stool” と “‘is it my Amelia?’” の間に配置するなど、活字とイラストを複合的に活用している。他にも、作品の中で日常的に繰り返されるシーンをイラスト化する ‘iterative’、異なる挿絵で共通した構図を繰り返し用いる ‘repetitive’、本文では触れられていない情報を挿絵の中に描き出す ‘extradiegetic’ など、挿絵の「語り」としての用法がそれぞれ具体例と共に説明されているが、その都度さまざまな作品の挿絵に触れることができ、非常に興味深い。序論の最後では、各章におけるケーススタディのデモンストレーションとして、1839年から1840年にかけて『ベント

レイズ・ミセラニー』に連載され大いに人気を博したウィリアム・ハリスン・エインズワースの『ジャック・シェパード』におけるクルックシャンクの挿絵の「語り」としての役割が考察されている。このように、本書の序論は非常に充実した内容となっている。

次に、連載小説における挿絵の「語り」としての役割を、「自叙伝的小説」「歴史的小説」「写実小説」「センセーション小説」のジャンルに分け、ケーススタディ的に検証した各章の要点を以下にまとめる。

自叙伝的小説を考察した第一章‘Imagining the Self’は、ハブロット・K・ブラウンの挿絵で1849年から1850年にかけて分冊刊行されたディッケンズの『デイヴィッド・コバフィールド』と、1863年から1864年にかけてデュ・モリアの挿絵で『コーンヒル・マガジン』に連載されたギヤスケルの『従妹フィリス』を取り上げ、1830年代から1840年代にかけてのイラスト入り印刷物の急増に伴って登場した挿絵付き連載小説が、出版業界におけるまさにその変革のはざまに立った主人公の自我と記憶をどのように描き出しているかを考察している。

‘Picturing the Past’と題した第二章は、歴史的過去を舞台とした小説として、1840年にクルックシャンクの挿絵で分冊刊行されたエインズワースの『ロンドン塔』、1848年にサッカレー自身の挿絵で分冊刊行された『虚栄の市』、そして挿絵なしの『オール・ザ・イヤー・ラウンド』の連載と並行して挿絵入りでイギリスおよびアメリカで連載刊行された『二都物語』を取り上げている。「九日間の女王」ジェーン・グレイの物語である『ロンドン塔』において、エインズワースとクルックシャンクは月に一度は共にロンドン塔に赴き作品の描写に必要な確認を行い、本文中での建築描写が細部にわたって挿絵と合致するように、クルックシャンクのスケッチはエインズワースの手元に届けられていたという。このような筆者とイラストレーターによる共同演出によって月々刊行された『ロンドン塔』は大反響を呼び、当時ロンドン塔を訪れる人の数は急増したという。今で言う、ドラマのロケ地巡りといったところであろう。『二都物語』における考察では、イギリスで分冊刊行されたブラウンによる絵画的な挿絵と、アメリカの『ハーパーズ・ウィークリー』で連載されたジョン・マクリーンの力強いタッチ

の挿絵の対称性が論じられている。同じ暴徒のシーンを描いた両者の挿絵の比較では、ブラウンが暴徒全体を風景としてとらえて描くのに対して、ぼやかして描かれた群衆の中心に暴徒の一人を大きく浮き立たせて描くマクリーンの挿絵は激情を直接的に表現しており、その対称性は一目瞭然である。

写実小説を考察する第三章は‘Hallowing the Everyday’と題して、いずれも1860年代の‘family magazine’に連載された、ギaskellの『妻たちと娘たち』、トロロープ『アリントンの「小さな家」』、そしてダイナ・マロック・クレイクの『女主人とメイド』を取り上げている。『妻たちと娘たち』はデュ・モーリアの挿絵で1864年から1865年にかけて『コーンヒル・マガジン』に連載され、『アリントンの「小さな家」』は1862年から1864年にかけてミレイの挿絵で同誌に連載された。『女主人とメイド』は1862年に同じくミレイの挿絵で、キリスト教的家庭雑誌である『グッド・ワーズ』に連載されたものである。本章は、ミレイとデュ・モーリアの緻密なタッチが描き出す日常の何気ない情景から醸し出される雰囲気が小説に与える効果を次のように述べている。

... in the expert literary hands of Gaskell, Craik, and Trollope, and the equally expert artistic hands of Du Maurier and Millais, the Victorian realist novel achieved its subtle representation of muted gestures and quotidian activities while conveying the profound human emotions that underlie everyday existence. (203)

この章に挙げられたミレイとデュ・モーリアの図版の数々は実に優美で完成度が高く、思わず見入ってしまうほどである。

センセーション小説を考察する第四章‘Arousing the Nerves’は、探偵的要素を特徴としたものとして、1862年に『ワンス・ア・ウィーク』に連載されたチャールズ・ウォーレン・アダムの*The Notting Hill Mystery*、いわゆる‘bigamy novel’として、1865年から1866年にかけて『アーゴシー』に連載されたチャールズ・リードの*Griffith Gaunt*、そしてセンセーション小説末期の作品として、1874年から1875年にかけて『グラフィック』に連載

されたコリンズの『法と淑女』を取り上げている。デュ・モーリアが手がけた *The Notting Hill Mystery* の挿絵の多くは、失神したり催眠をかけられ仰向けに横たわる女性の図であり、視覚的に読者に犯罪の可能性および緊張感を伝えている。また、挿絵には文章中の引用とページ数がキャプションで付され、挿絵が本文のどの部分と合致するのかが読者が確かめることができる工夫が施されているという。一方、重婚、不貞、性的欲望が描かれていることで酷評された作品である *Griffith Gaunt* のスモールの挿絵は、どれも見た目に刺激的なシーンが描かれていない。しかし、馬をモチーフとしたそれらの挿絵の数々は、動物的、性的イメージを想起させ、作品の持つセンセーションナリズムを高めているという。

本書は結論として、読む行為における「テキスト」と「イラスト」の相関性を考察することによって、思索的、複合的な読みを促すヴィクトリア朝の挿絵入り連載小説の複雑性と深みが見えてくると述べる。すなわち、後に本の形で出版された形態で読む以上にヴィクトリア朝における挿絵入り連載小説は、「挿絵」と「連載」という要素が相まって、本書のタイトルが示す通り「プロットが深まる (*The Plot Thickens*)」のである。ヴィクトリア朝小説研究において、作品を当時の読者に届けられた形で考察することは不可欠な要素であり、その意味で本書は有効な手引きとなるケーススタディである。